

今泉・竹ノ花遺跡

—長野県塩尻市今泉遺跡・竹ノ花遺跡
発掘調査報告書—

1987

塩尻市教育委員会

今泉・竹ノ花遺跡

——長野県塩尻市今泉遺跡・竹ノ花遺跡
発掘調査報告書——

1987

塩尻市教育委員会

序

塩尻市内において、昭和59年度から始まりました長野県松本地方事務所管の東山山麓地区農道整備事業も着々と進行し、今年度は片丘北熊井地区を中心に施工されることになりました。これに伴い、同地区内の今泉遺跡、竹ノ花遺跡の一部が破壊されることになったため、工事施工に先立ち、埋蔵文化財保護の立場から塩尻市教育委員会に緊急発掘調査が委託され、市教育委員会では、小松克己先生を団長に調査団を編成いたしました。

発掘調査は、耕作が終了した昭和61年10月下旬から同11月下旬にかけて行われました。特に竹ノ花遺跡では、縄文時代前期の住居址が確認され、この地域における該期の研究を進めて行くうえで貴重な資料を提出することになりました。

終わりにあたり、本調査にご理解、ご協力を下さいました地元関係役員、地主の方々、また作業に献身的にご協力いただいた発掘調査参加者の方々など関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

昭和62年2月

塩尻市教育委員会

教育長 小 松 優 一

例　　言

- 1、本書は、昭和61年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区に伴う、松本地方事務所と塙尻市教育委員会との契約に基づいて、塙尻市大字片丘北熊井地区における今泉遺跡ならびに竹ノ花遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2、調査は、今泉遺跡発掘調査団（団長 小松克己氏）、竹ノ花遺跡発掘調査団（団長 小松克己氏）に委託し、現場での調査は、今泉遺跡が昭和61年10月21日から11月4日、竹ノ花遺跡が同年11月5日から11月22日まで実施した。
- 3、遺物および記録文の整理作業、報告書作成は、平出遺跡考古博物館において昭和61年12月から昭和62年2月まで行った。
- 4、本書の執筆は、各調査員、調査補助員が分担して行い、文責は文末に記した。
- 5、本書の編集は、小林、鳥羽、伊東が行った。
- 6、本調査の出土品、諸記録は、平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序

例 言

| | |
|---------------------|----|
| 第Ⅰ章 調査状況 | 1 |
| 第1節 発掘調査に至る経過 | 1 |
| 第2節 調査体制 | 2 |
| 第3節 調査日誌 | 3 |
| 第4節 遺跡の状況と面積 | 5 |
| 第Ⅱ章 遺跡周辺の環境 | 6 |
| 第1節 自然環境 | 6 |
| 第2節 周辺遺跡 | 6 |
| 第Ⅲ章 調査遺跡 | 9 |
| 第1節 今泉遺跡 | 9 |
| 1 位置と地形 | 9 |
| 2 発掘区の設定 | 9 |
| 3 調査概要 | 9 |
| 4 遺構 | 12 |
| (1)第1号ロームマウンド | 12 |
| 5 遺 物 | 13 |
| 6 まとめ | 13 |
| 第2節 竹ノ花遺跡 | 14 |
| 1 位置と地形 | 14 |
| 2 発掘区の設定 | 14 |
| 3 調査概要 | 14 |
| 4 遺構、遺物 | 16 |
| (1)第1号住居址 | 16 |
| (2)第1号ロームマウンド | 19 |
| (3)小豎穴 | 20 |
| (4)第1号墓址 | 21 |
| (5)遺構外出土遺物 | 24 |

| | |
|------------|----|
| 5 竹ノ花と北鎌井城 | 24 |
| 6 まとめ | 26 |
| 第IV章 結 語 | 27 |

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

昭和58年度から開始された県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区は、順次工事が進められ昭和59年度からは塩尻市地域もその対象地区となった。当事業により設置される通称「山麓線」が通過する塩尻市片丘地区は市内でも有数の遺跡密集地帯であることから、塩尻市教育委員会は事業主体の長野県松本地方事務所と埋蔵文化財保護の立場から再三にわたる協議を重ね、昭和59年度は片丘南内田地区の山ノ神遺跡において発掘調査を実施し、記録保存を行った。

今年度は、昭和61年5月13日、松本合同庁舎において、松本地方事務所、市耕地林務課、市教育委員会の三者により、年度内着工が予定されている路線内での、今泉遺跡、竹ノ花遺跡の発掘調査について協議がなされた。この結果にもとづき、市教委は5月20日付で松本地方事務所からの両遺跡発掘調査に関する委託を受け、さらに市教委は、10月16日、今泉遺跡の発掘調査を今泉遺跡発掘調査団(団長 小松克己氏)に、11月1日、竹ノ花遺跡の発掘調査を竹ノ花遺跡発掘調査団(同長 小松克己氏)に再委託した。現場における発掘調査は、今泉遺跡、10月21日から11月4日、竹ノ花遺跡11月5日から11月22日に行われた。

発掘調査計画書(一部のみ記載)

今泉遺跡

- 1、発掘調査地 塩尻市大字片丘
- 4、発掘調査の目的及び概要 開発事業農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区に先立ち120m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和61年30日までに終了する。調査報告書は昭和62年3月25日までに刊行するものとする。

- 6、調査に要する費用 600,000円

- 7、調査報告書作製部数 300部

竹ノ花遺跡

- 1、発掘調査地 塩尻市大字片丘
- 4、発掘調査の目的及び概要 開発事業農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区に先立ち300m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和61年11月30日までに終了する。調査報告書は昭和62年3月25日までに刊行するものとする。 6、調査に要する費用 2,200,000円

- 7、調査報告書作製部数 300部

第2節 調査体制

(1) 今泉遺跡

団長 小松 克己 (塙尻市誌編纂委員長)

調査員 小林 康男 (日本考古学協会員、市教委)

鳥羽 嘉彦 (長野県考古学會員、〃)

伊東 直登 (〃、〃)

調査補助員 駒原 典明 (信州大学学生)

参加者 池田貴江子、小松重久、小松静子、小松淳子、小松鈴子、小松三枝子、小松幸美、小松幸代、小松義九、桜井洋子、牧野内嘉津子、太田正子、金田和子、中村ふき子、古賀馨子、山本敬子

(2) 竹ノ花遺跡

団長 小松 克己 (塙尻市誌編纂委員長)

調査員 小林 康男 (日本考古学協会員、市教委)

鳥羽 嘉彦 (長野県考古学會員、〃)

伊東 直登 (〃、〃)

調査補助員 駒原 典明 (信州大学学生) 柳沢 正寿 (信州大学学生)

参加者 青木昌了、池田貴江子、伊東逸子、小松重久、小松静子、小松淳子、小松鈴子、小松ます子、小松三枝子、小松美津子、小松幸美、小松義九、桜井洋子、代田重竹、牧野内嘉津子、南澤みや子、柳沢千寿子、吉江みより、青木千秋、池上清二、五味ますみ、中村芳晴、藤松謙一、保科武久、山口宇一、横山きよ子、吉江正男、太田正子、金田和子、中村ふき子、古賀馨子、山本敬子

| | | |
|-----|---------------|-------|
| 事務局 | 塙尻市教育委員会教育長 | 小松 優一 |
| | 市教委総合文化センター所長 | 二木 三郎 |
| 〃 | 文化教養担当課長 | 清水 良次 |
| 〃 | 文化教養担当次長 | 原田 博 |
| 〃 | 平出遺跡考古博物館学芸員 | 小林 康男 |
| 〃 | 文化教養担当主事 | 鳥羽 嘉彦 |
| 〃 | 〃 | 伊東 直登 |

協力者 小沢速水、小松庄治、浜 文雄、小口鉄也、小松市ノ助、小松 弘、小松生和、小

松不俊春、中野 智、武居信治、島崎喜美男、菊池和利、小松嘉彦、小松正広、竹
渕元亮、小松修治、中野喜夫

地 権 者 今泉遺跡 篠宮源一、松沢信市

竹ノ花遺跡 小松重利、小松兵一郎、小松市之助、矢島乙彦

第3節 調査日誌

今泉遺跡

昭和61年10月21日（火）晴 バックフォーによる表土除去の後、発掘器材搬入。

10月25日（土）晴 調査方法説明後、テントを設営し、助簾による検出作業を開始する。全体的に礫が多い。

10月26日（日）定休日

10月27日（月）曇 助簾による検出作業を続けるものの、礫層のため作業が捗らない。調査区北側において地山と思われる礫含有ローム層検出。石鎌一点出土。

10月28日（火）曇 検出作業を続ける。グリッドを設定し、杭打ちを行う。グリッドは5m×5mで、西から東へA～C、北から南へ1～12とする。A-5グリッドにおいて、ロームマウンドと思われる落ち込みが検出されたが、周間に攪乱がみられるので、掘下げ後判断することとする。黒曜石フレーク出土。

10月29日（水）曇 調査区中央部で地山となるローム層が検出されず、また多量の礫による作業が困難を極めているため、B-5～8グリッドに1×20mトレチを設定し掘下げることとする。ロームマウンドと思われる落ち込みの検出写真、平面図実測後、ドーナツ状の黒褐色土部分の半載を行いロームマウンドと確認する。

10月30日（木）曇 第1号ロームマウンド、セクション図化後完掘し平面図を終了する。トレチ中央部において、深さ30cm程で粘土質のローム土層が確認され、調査区中央部がやや落ち込んだ地形となっていることが判明した。

10月31日（金）快晴 第1号ロームマウンド、写真撮影終了。トレチの掘下げを終了しセクション図化する。水田を作るにあたって入れたと思われる暗渠が3ヶ所と土管水路1本が出土した。

11月1日（土）晴 全体図作成。全面清掃後、全体写真、トレチ写真等の撮影を行い、全調査を終了する。

11月2、3日（日、月）定休日

11月4日（火）曇 テント解体後、発掘器材を次の発掘現場竹ノ花遺跡へ搬出する。

竹ノ花遺跡

昭和61年11月5日（水） 曇 バックフォーおよびブルドーザーにより調査区北側から表土除去開始。礫が非常に多い。発掘器材搬入。

11月6日（木）快晴 本日から作業員による調査を開始する。朝、調査に係る説明を行った後、テントを設営し、調査区北側から助簾による検出作業を開始する。並行して重機による表土除去続行。調査区南にて、黒褐色土の落ち込みの中から縄文の土器片出土。住居址と思われる。

11月7日（金）曇 午前中で重機による表土除去を終了する。調査区南の一部を除いて礫の多い土層である。助簾による検出作業もこのためなかなか捗らない。土器片少量出土。

11月8日（土）晴 5m×5mグリッドを設定し、枕打ちを行う。西から東へA～C、北から南へ1～34で全長約160m。B-28において、小竪穴と思われる楕円形の黒色土の落ち込み検出。南斜面の住居址と思われる落ち込みは、検出作業の結果1ヶ所だけと確認された。

11月9日（日） 定休日

11月10日（月）晴 検出作業により、小竪穴数基と、B-7グリッドにおいてロームマウンド1基が確認される。1号住居址にベルトを設定し、掘下げを開始する。小片となった縄文土器片と黒曜石フレークが少量出土。1回目の遺物取上を行う。第1号ロームマウンド、検出平面図測図。

11月11日（火）晴 1号住居址、堅緻な床面検出。石錐、土器片の出土をみたが、遺物は全体的に少ない。B-28の落ち込みを1号小竪穴とし、半載線設定後掘下げを開始する。

11月12日（水）晴 1号住居址、床直上に炭化物が所々認められる。遺物取上。1S、セクション図化。C-6～9グリッドの落ち込み調査のため1×20mトレンチを設定、掘下げ開始。

11月13日（木）曇 1号住居址、北から西にかけて壁検出、円形プラン確認。1号ロームマウンド、半載線を設定し黒褐色土部分の掘下げを開始する。2～10S、半載後セクション図化。1～9S、全掘後写真撮影終了。

11月14日（金）晴 1号住居址、東西セクション図化後、ベルト除去作業。11～13S、半載後セクション図化。10、11、13S、全掘後写真撮影。1号ロームマウンド、半載終了。グリッド別遺物取上。

11月15日（土）曇 1号住居址、南北セクション図化、床面精査の後、平面図測図、写真撮影まで終了。1～13S、平面図測図。1号ロームマウンド、セクション図化後全掘開始。

11月16日（日） 定休日

11月17日（月）曇 1号ロームマウンド、掘下げ終了、平面図、写真撮影終了。全体図作成。全面清掃の後、北側からの全体写真撮影。

11月18日（火）快晴 霧を取り除き、全面清掃の後南側からの全体写真撮影。本日から、調査区南側の礫を含まないローム層区域に4ヶ所の3×3mグリッドを設定し、プレ調査を開始する。

11月19日（水）快晴 プレ調査を続行する。遺物なし。

11月20日（木）晴 プレ調査調査続行。IおよびIIグリッドが深さ20~30cm、直径5~20cmの砾を多量に含む層となり、調査区中央部から北にかけて検出された砾層上に、この範囲だけローム土が残存した地形であると判明する。各グリッド、60~70cm掘下げ。

11月21日（金）快晴 午前中でブン調査を終了し、今回の全調査を終了する。プレ調査による遺物は皆無。午後、テント解体、発掘器材整備。

11月22日（土）晴 器材撤収。

整理作業は12月~2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、注記、復元作業、実測図作成、作成図面の整理、製図、図版作成を行う。報告書の原稿執筆も併行して実施する。

第4節 遺跡の状況と面積

| 遺跡名 | 場所 | 現況 | 種類 | 全体面積 | 事業対象面積 | 最低調査予定面積 | 調査面積 | 発掘経費 |
|-----|--------------|----|-----|----------------------|---------------------|-------------------|---------------------|------------|
| 今泉 | 塩尻市片丘 北熊井 | 水田 | 包蔵池 | 9,000m ² | 500m ² | 120m ² | 440m ² | 600,000円 |
| 竹ノ花 | # | 畠 | # | 18,000m ² | 1,700m ² | 300m ² | 1,400m ² | 2,200,000円 |

第1表 発掘調査経過表

| | 10 | 11 | 12~2 | 主な遺構 | | 主な遺物 |
|-----|----|----|------|----------------|---|----------------------------------|
| | | | | 遺物 図面 原稿 | 整埋 作成 執筆 | |
| 今泉 | | 発掘 | | | ロームマウンド 1 | 石器、黒曜石フンサーク |
| 竹ノ花 | | 発掘 | | 遺物 図面 原稿 | 縄文時代前期住居址 1 ロームマウンド 1 小 竪 穴 13 墓 穴 1 | 縄文時代前期 土器、石器 縄文時代中期 土器 古 瓶 |

(事務局)

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境（第1図）

片丘地区は塩尻市の東側を流れる田川から高ボッチ山麓までを地区域とし、その大部分が西へ傾斜する丘陵地にある。

この丘陵は山麓斜面に沿って発達する崖錐性のもので、塩尻市街地の東方、小坂田付近から松本市の寿付近まで、2km前後の幅を維持しながら約10kmにわたって延びているものである。平均勾配は、約6°と急傾斜をなしているために、山麓から流下する群小の河川による開拓は著しい。これらはすべて丘陵直下を北流する田川にはば直角に注ぎ込んでいる。

丘陵上の遺跡は、これらの諸河川による深く開拓された台地の縁辺部もしくは尾根状の台地上に展開しており、眼下に北アルプスの峻嶺の連なりと松本平が一望される好条件の立地環境にあるといえよう。

崖錐性の疊層は、フォッサ・マグナ西縁の断層岸に伴うもので、この付近の基盤である古生層および洪積世前期の塩巻累層を不整合に被覆し、層厚は約30m、盆地に向かって緩傾斜をなしている。片丘疊層、赤木山疊層といった名称で呼ばれるもので、一般に両者は岩相的に類似しているために判別は難しく一括されている。角礫～亜角礫層で淘汰が悪く、基質は火山灰質の褐色シルトである。疊層は古生層機縫の硬砂岩、粘板岩、珪質頁岩、新第三系の砂岩、凝灰岩、貫入岩体の閃綠岩類、第四系塩巻累層の安山岩などが多く存在している。

疊層の上部には火山灰質のロームが3～4mの層厚で被覆しているが、これはさらに2層に細分される。下部は黄灰色の軽石質ロームであり、御岳山起源の小坂田ロームといわれているものである。これに対し上部はシルト質の鮮明な褐色を呈しており、東駒岳起源とされている波田ロームである。両者は共に風成で塊状を呈しており、地殻による著しい層厚の変化はない。

（鳥羽 嘉彦）

第2節 周辺遺跡

今回調査が実施された竹ノ花、今泉両遺跡は、筑摩山地東麓の扇状地に発達した舌状台地上に立地している。この筑摩山地東麓は松本平でも最も遺跡が多く存在する地域であり、両遺跡の周辺にも数多くの遺跡が知られている。以下、両遺跡に関連をもつと思われる先土器、縄文時代を中心として周辺遺跡を概観したい。

先土器時代では、小丸山、山の神、向陽台で遺物が発見されている。小丸山では、全長13.7cmの



- 1.今泉遺跡
- 2.竹ノ花遺跡
- 3.山ノ神遺跡
- 4.小九山遺跡
- 5.女夫山ノ神遺跡
- 6.中原遺跡
- 7.組原遺跡
- 8.上木戸遺跡
- 9.北原遺跡
- 10.向陽台遺跡

第1図 遺跡位置図

珪岩製の尖頭器が出土し、山の神では中央道長野線建設に伴う発掘調査によってローム層中から黒曜石片が集中して出土する個所（ブロック）が、また向陽台では塙尻20号バイパス建設に伴う調査によりナイフ形石器がそれぞれ発見されている。このほかにもこの山麓には東山から柿沢にかけて青木沢、柿沢の諸遺跡で遺物が採集されている。従来、松本平は先土器時代の遺跡が希薄であるとされてきたが、最近の調査結果は徐々にこれを書き換える傾向にある。

縄文時代草創期では、片丘地区には今だ遺跡の確認はない。しかし、周辺では東山青木沢、柿沢、吉田向井、北原などいくつかの遺跡が知られている。特に塙尻峰下の東山、柿沢地区への遺跡の集中化は当時の松本平における1つの捉点的地域として重視されねばならない。

早期には、竜神平、俎原、山ノ神、向陽台、堂の前、福沢などの諸遺跡があり、向陽台、竜神平、堂の前では住居址が検出されている。向陽台では押型文期の住居址4軒、集石炉4ヶ所、竜神平、では早期末の住居地1軒、堂の前では早期末の住居址6軒がそれぞれ発見され、村としてのまとまりを示した貴重な調査例となっている。松本平では、この時期の集落址は今のところ他には未発見であり、片丘周辺地域が当時の主要居住域であったことを示しており興味深い。

縄文前期では北龍井地区だけでも、境沢、男屋敷、富士塚、中原、俎原、立石、竹ノ花、女夫山ノ神、大林と9ヶ所の遺跡が残されており、遺跡の増加が認められる。発掘例も多く、神ノ木、有尾、諸磯A、B、C各期の住居址が集石、小豊穴とともに検出された男屋敷、住居が見つかった女夫山ノ神、黒浜期の住居址を出した竹ノ花などで貴重な資料を提供している。

中期は、狐塚、渋沢、境沢、竹原、男屋敷、富士塚、源十窪、一本杉、長者清水、鳶沢、俎原、立石、大沢、女夫山ノ神、菖蒲沢、牛亮沢、城、小丸山、二本木、君石、上木戸、山ノ神など枚挙にいとまがないほど多くの遺跡がある。この中期は遺跡の激増とともに大集落址の発達が著しい。その代表例に俎原、小丸山をあげることができる。俎原は、中期初頭の梨久保期から最終末の曾利V期まで中期全期間にわたって集落が営まれた大集落址で、小豊穴をもつ直径40mの中央広場を住居群が取り巻くという典型的な環状集落である。また小丸山は、中央広場に伏焼をもつ小豊穴を有し、これを中心に住居群が展開していた。これらはいずれも当地域での該期の中核的集落といえるが、現在遺物散布地となっている遺跡は、正式調査を実施すれば各種遺構・遺物が出てくる可能性が高く、それぞれ立地する台地を中心とする核的集落になる可能性が強い。いずれにしても、この地域は八ヶ岳山麓、天竜川流域とともに縄文中期遺跡の最密集地帯であり、ここでの中期遺跡の研究成果は、中期文化解明のための大きな手がかりとなるものと思う。

縄文後期に入ると、竜神、上木戸、男屋敷などわずかな遺跡が知られる程度で遺跡は激減する。住居の発見はなく、少量遺物が採集されているにすぎない。このような状況は、次の晩期に入っても同様で桜林、別方などで遺物の出土が認められる程度となる。立地は中期以前とは異なり、一段低位の田川流域沿いに多くなり、古地下ないしは斜面での遺物の出土が顕著となる。小遺跡ではあるが後期よりも遺物の量は多く、次の弥生時代に向かって停滞していた活力が徐々に高まっていった様が読みとれる。

（小林 康男）

第III章 調査遺跡

第1節 今泉遺跡

1 位置と地形（第2図）

今泉遺跡は、塩尻市の北東部、片丘北熊井地区に存在する。片丘地区は、高ボッチ山塊の西麓斜面にあり、山麓から西流する群小の河川によって形成された幾多の複合扇状地による起伏に富む地形をなしている。今回調査された今泉遺跡も、こうした丘陵の一つに立地し、北を権現沢、南を松葉沢に挟まれた西向きの緩斜面上にある。

発掘区は、長細い小規模な尾根状地形のはば東端に位置し、東へ300mほどの地点では、高ボッチ山麓の急斜面が展開している。したがって、数多くの遺跡が密集する片丘地区にあって、比較的高所に位置し、標高785mである。

2 発掘区の設定（第3図）

道路用地は、片丘丘陵を西斜して伸びる小規模な尾根状台地を南北に横断する形にあり、調査区は、台地上の高所にある水田に設定された。発掘調査に先がく試掘調査によれば、調査区北側では、深さ20cmほどで砂質のローム土層が検出されたが、中央部および南側では、大小の礫を多量に含有する暗褐色土層により地山の検出が困難な状態であり、水田造成時の擾乱が推察された。

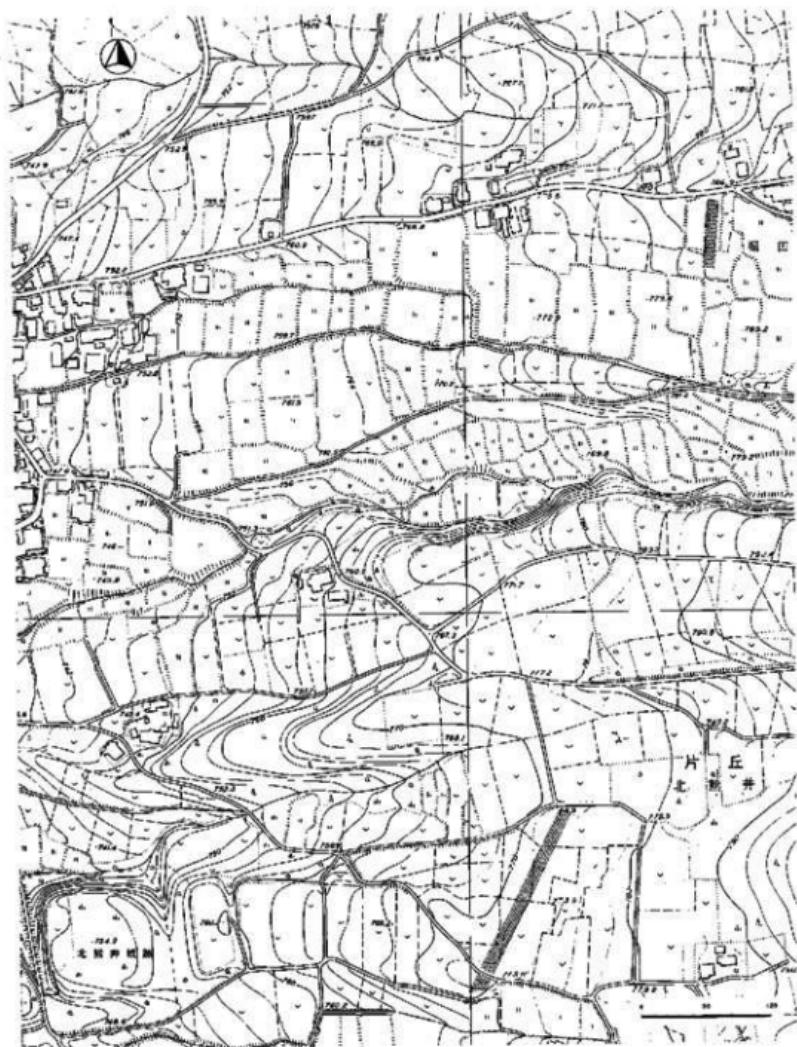
調査は、バックフォーによる表土除去を行った後、グリッドを設定した。グリッドは5×5mで、西から東へ向かってA～C、北から南へ向けて1～12で、発掘区総面積は440m²である。

3 調査概要

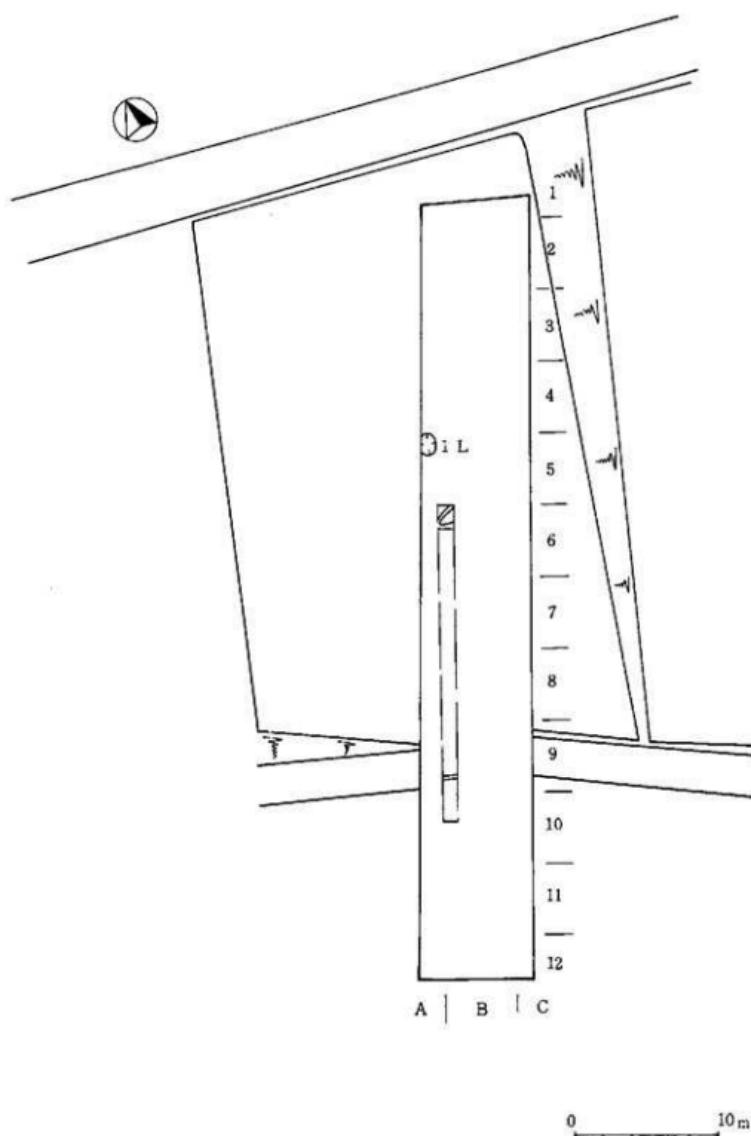
調査を始めるにあたり、地元の方から、今回の発掘地域である水田部分が、從来もう少し小高い台地であったものを削平して造成したものであることを指摘され、遺跡の立地としては十分な条件を備えているものの、その成果については、当初から疑問視されることになった。

調査の結果、地山ローム内まで掘り込まれた暗渠が3本検出され、調査区のほとんど全面にわたって擾乱を受けていることが判明した。遺物は、黒環石の石鏃1点とフレーク2点のみであったが、こうした擾乱にもかかわらず、当台地上に遺跡の存在することが確認された。遺構は、直径175cmの比較的小さなロームマウンド1基を確認した。

（伊東 直登）



第2図 今泉遺跡・竹ノ花調査地区図



第3図 中原遺跡遺構全図

4 遺構

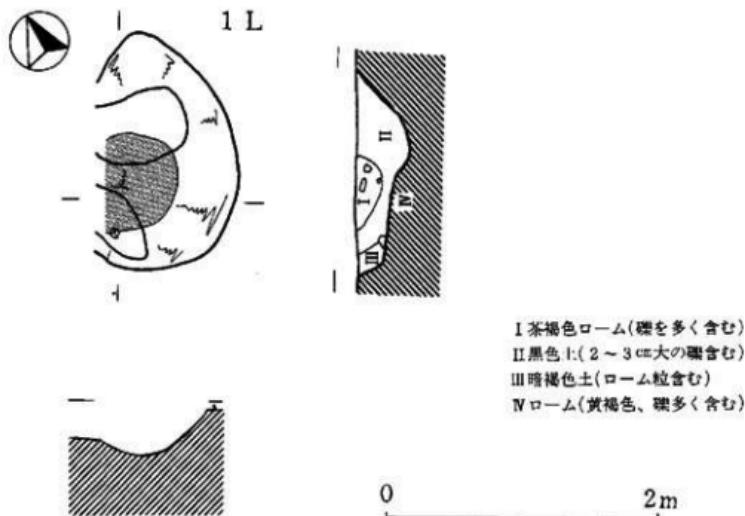
(1) 第1号ロームマウンド (第4図)

今回の調査で、ロームマウンドは1基が検出された。検出グリッドは調査区西側のA-5で、西側5分の1ほどは調査区外のため未調査である。検出面において、直径70cmほどの円形のローム土を黒褐色土が取り囲むように認められたため、ロームマウンドと推察されたものの、周囲の擾乱が激しく、本址も単なる擾乱の可能性も残されており、確認と土層記録化のため南北に半載線を設定し、初めに黒褐色土の掘下げにより当該層が中央ローム土ドに入り込んで堆積していることを確認した後、中央ローム土部も半載し、セクション図化後全掘した。

プランは南北175cmで、これを長径とする橢円形を呈すると思われ、東西は推定120cm程度と考えられる。落ち込みは、底部をやや北寄りに持つ鐘鉢状で、南側に小さなテラスを持っており、最深部で深さ50cmを測る。再堆積ロームは地山に統かず、最大厚25cmのレンズ状で、下層の黒褐色土層により地山のローム層とは切り離された状態となっており、南側にロームブロックを含有する暗褐色土層の堆積が認められた。黒褐色土層が直径1~3cmの小礫だけを混入していたのに対し、地山も含めて他の層は直径10cm前後の礫を多く含んでいた。出土遺物はない。

近年の東山山麓における発掘調査が進むにつれ、ロームマウンドに関する資料も増加しつつあるが、その中で当該ロームマウンドは最小規模のものとして位置づけられる。

(伊東 直登)



第4図 第1号ロームマウンド

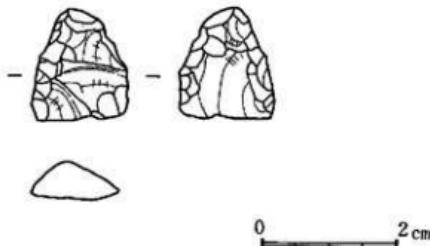
5 遺物（第5図）

今回の調査で出土した遺物としては、石錐1と黒曜石片2がある。量的には僅少であった。石錐は、調査区北端の耕作土層から出土した。胸部を欠いた先頭部破片で、現存長1.7cm。やや部厚い剝片を用い、周縁部に二次加工を施すが、裏面中央には第一次剥離痕を大きく残している。加工は粗雑である。黒曜石製。0.8g。

黒曜石剝片は、調査区中央から北寄りにかけて、耕作土中から出土した。

このように、出土した遺物は、ともに調査区北寄りの耕作土中から出土しており、上方からの流れ込みと受け取られる出土状況を示していた。

（小林 康男）



第5図 今泉遺跡出土遺物

6 まとめ

本遺跡発掘調査での遺構、遺物の検出は僅少であった。わずかにロームマウンド1基と黒曜石製石錐および黒曜石片2が得られたのみである。調査区域は田園下であり、開田時削平された可能性が強く、そのことが遺構・遺物の遺存状態に大きく影響しているものと考えられる。

この地域は、縄文前期・中期の遺跡として知られる富士塚遺跡のすじ西方に位置しており、遺物の出土状態が流れ込みの可能性も強いことを考慮すれば、今回の調査地域は富士塚遺跡の一部に含めて考えることが妥当といえる。富士塚遺跡の西端を把握することができた点は、今回の調査の成果の一つといえる。南に隣接する男屋敷遺跡と富士塚遺跡との関連性を究明するうえで、富士塚遺跡の範囲確定は重要な作業の一つであり、今回西方部分の限界がおさえられる点は評価できる。

（小林 康男）

第2節 竹ノ花遺跡

1 位置と地形（第2図）

竹ノ花遺跡は、塩尻市大字片丘北熊井に存在する。塩尻市東北部にある片丘地区は、高ボッチ西麓の緩やかに西傾斜した複合扇状地帯上にあり、群小の河川による開拓のため起伏の多い複雑な地形を形成しているが、今回調査された竹ノ花遺跡もこうした尾根状台地の一つに立地している。

当該遺跡が位置する台地は、松葉沢川と南久保の沢に北側と南側を深く開析される広範な地形をなし、中央を、東西に走る大きな窪地帯が台地の西先端までを二つに分けている。窪地帯の北側台地上が一本杉遺跡、南側台地上が竹ノ花遺跡となり、竹ノ花遺跡の西側に続く尾根先端部分には、中世の北熊井城跡が郭跡を現在に残している。標高は772~774mである。

2 発掘区の設定（第6図）

道路用地は、竹ノ花遺跡が立地する台地上を南北に横断する形となり、遺跡の中心と推察される北熊井城跡東側の台地東端をかすめるように通過する。調査区は、この部分を南端とし、北へ向かって緩やかな起伏をもって続く畠地帯に設定され、北端は、台地中央の窪地までとした。

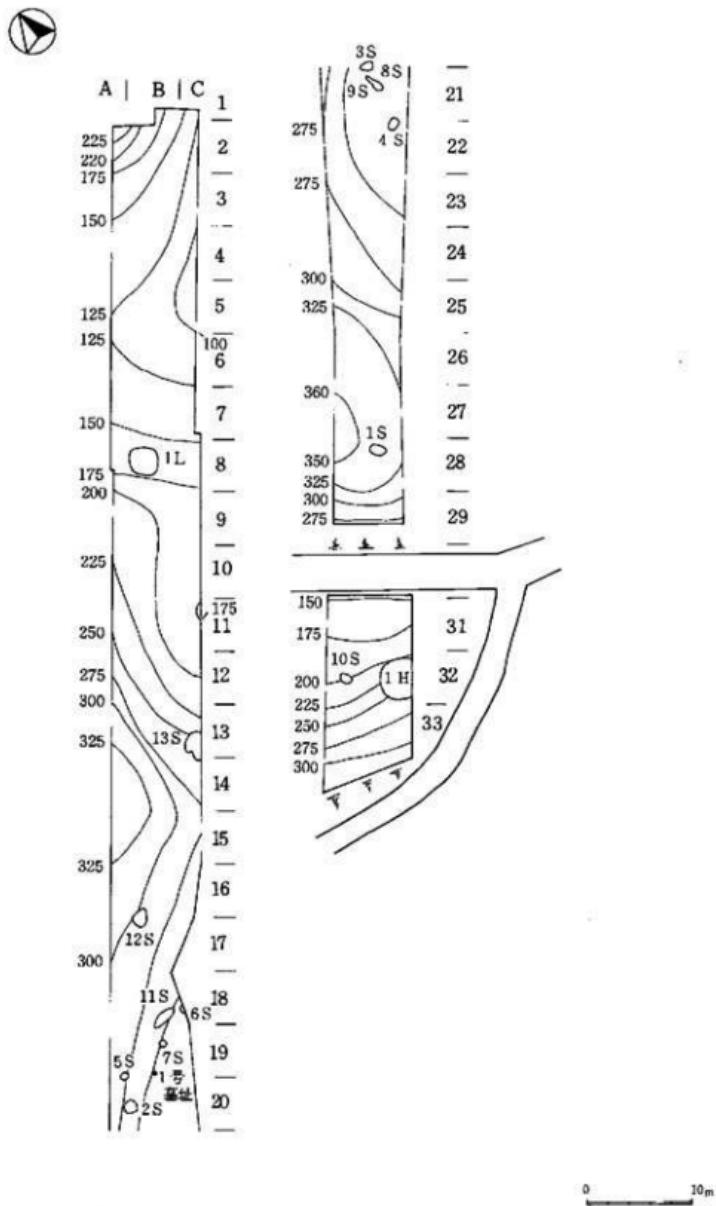
発掘調査に先だつ試掘調査によれば、調査区北側では深さ50cm、中央部で30~50cmの暗褐色土堆積が確認され、現地表面に比して地山ローム面の起伏が激しいことを予想させた。また、暗褐色土層下部では、大小の礫の堆積がみられた。調査区南側の台地上では、深さ20cmほどで褐色のローム層が検出された。

調査は、バックフォーとブルドーザーによる表土除去を行ったのち、グリッドを設定した。グリッドは5×5mで、西から東へ向ってA~C、北から南へ向って1~34で、発掘総面積は1,400m²である。

3 調査概要

今回の調査は、北熊井城跡東側の緩やかな斜面上に立地する竹ノ花遺跡を南北に横断する形で行われ、遺跡の中心と思われる部分からは東にやや離れた地域から北方向へ遺跡の標辺部を実施する形となった。

調査の結果、遺構は住居址1軒、ロームマウンド1基、小豎穴13基が検出され、遺物としては、住居址に伴い縄文時代前期黒浜期の土器、石器が出土した。また、掘り込みの確認はできなかつたが、「皇宗通宝」ほか5枚の渡来鏡が一括出土し、墓址と推察された。遺構外の遺物は、量的には少ないものであったが、縄文時代後期の遺物が出土し、また調査区西側に続く台地上では曾利期の土器片が多く採集できた。住居址は調査区外に半分を残して検出されたが、土器、石器とも



第6図 竹ノ花遺跡遺構全体図

に少量の出土をみただけであった。13基の小堅穴に遺物の出土はみられなかった。

(伊東 直登)

4 遺構、遺物

(1)第1号住居址(第7・8図)

調査の経過

本址は調査区の南端に位置し、尾根陵線よりやや南側へ下りた南向き斜面にある。グリッドはB、C-32で第10号小堅穴が西約3mの場所に位置する。本址の確認はローム層上層中に暗褐色の落ち込みが認められ、また、検出面で土器片の出土もあったため比較的容易であった。覆土は上層より暗褐色土→茶褐色土→暗褐色土であった。全層より遺物の出土はみられ、床面上の暗褐色土層中には焼土、炭化物が多く確認された。

遺構

本址の半分が調査区外だったためプラン全体を明確にすることはできなかったが、径約4mの円形を呈すると考えられる。壁は北側、西側で保存状態良く、それぞれ53cm、44cmを測る。しかし本址は南向きの自然傾斜のため、南側の壁のはんどんは流失しており約9cmを測るのみであった。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、保存状態は良好であった。床面は平坦で全体に軟弱であり、堅硬な床が住居のはば中央、炉の周辺に部分的に残っている程度である。炉は住居のはば中央に位置し、掘り込み式のものである。床面より約8cm掘り込んであり、焼土および炭化物が混入していた。またその周辺にも焼土、炭化物が散在していた。ピットは全部で4個検出されたが、P1 P2 P3は規模的、P4は位置的理由より主柱穴とは考えられず確認できなかった。それぞれのピットの深さはP1-27、P2-17、P3-25、P4-31cmであった。

所属時期は縄文時代前期、黒浜式期に属する。

土器

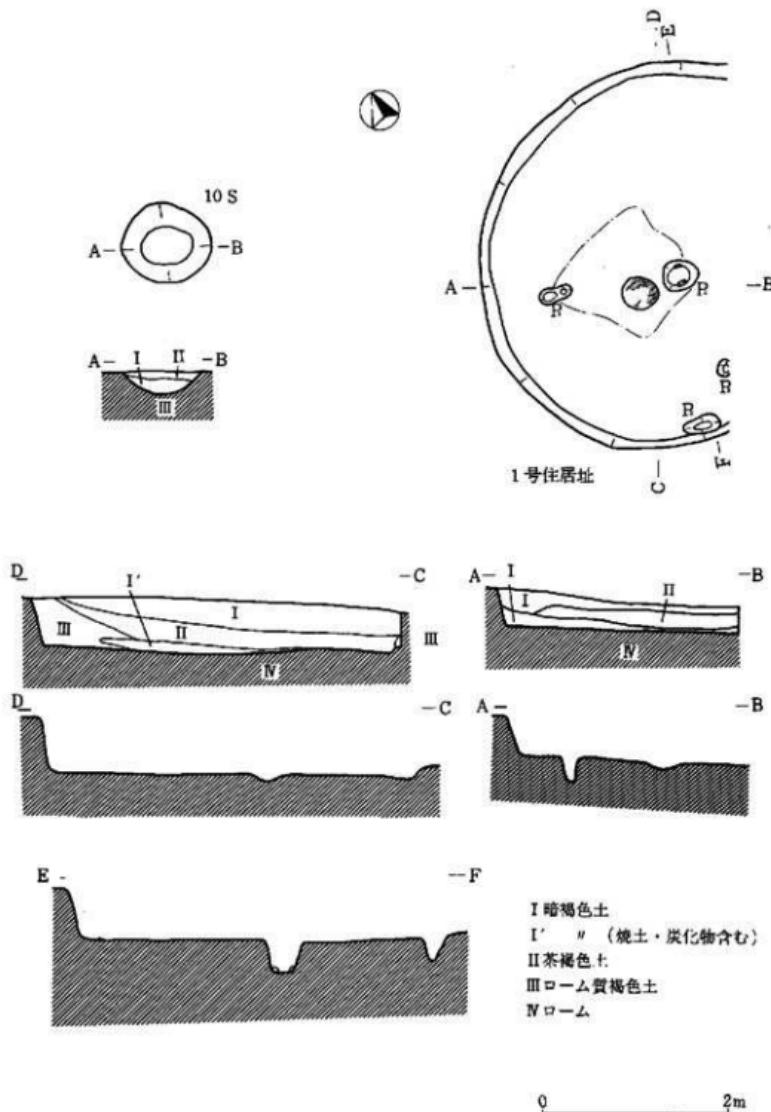
本址からの出土遺物は少なかった。これらの遺物は住居の北側および中央部の床上の暗褐色土層中より特に出土した。

1は破片が住居のはば全域に散在しており、約3分の1復元できたのみであるが本址ではその全体がうかがえる唯一の土器である。口縁は波状を呈している。胴部はふくらみをもち、胴上半部でややくびれ、口縁に向かって開く深鉢である。口径は約24cm、底径10cm、器高37.3cmを計る。器面のはば全体には斜縄文が施されているが規則性は認められない。色調は明褐色で焼成は良く、胴部には一部ススが付着している。

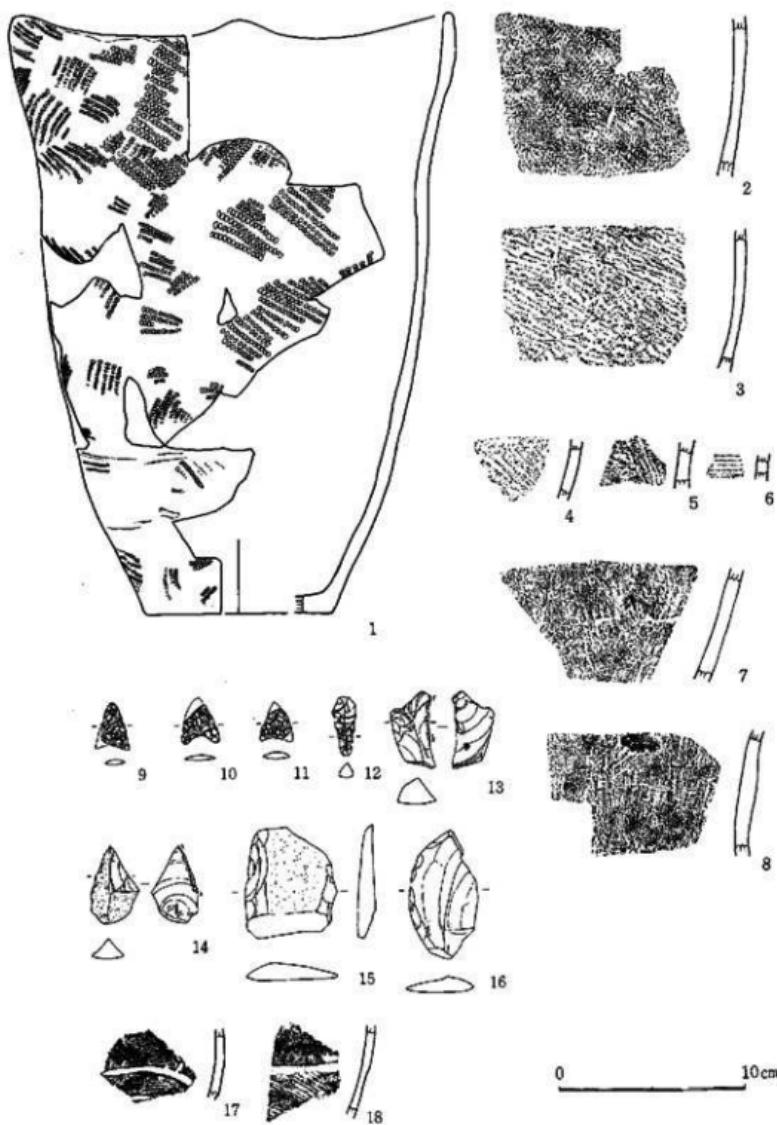
2~5は斜縄文によって施文されている。2はゆるい縄によって施文されており、焼成は大変良い。3は外面および内面にスス、炭化物が付着しており、摩耗が激しい。

6は竹管によって施文されている。また図示してはいないが浅鉢型土器の破片も出土している。これらは混入遺物と考えられる。

7、8は無節の縄文が施されている。焼成は大変良い。7、8は同一個体と考えられる。



第7図 第1号住居址・第10号小塹穴



第8図 第1号住居址・遺構外出土遺物

石器

本址出土の石器には、石鎌3、石錐1、打製石斧1、不定形石器3の計8点があり、他に黒曜石剥片420gがある。

石鎌9は、全長2.4cm、底辺に浅い抉りを持ち、左脚を欠いている。黒曜石製、0.9g。10は、現存長1.5cm、先端部を欠いているので、やや大形の石鎌である。底辺にやや深い抉りを持つ。黒曜石製、0.8g。11は、先端部と右脚を欠く。現存長1.7cm、0.8g、黒曜石製。

石錐は、長さ3.2cmのつまみ部のないもので、錐部は断面三角形を呈する。調整は粗雑。黒曜石製、3.4g。

打製石斧15は、頭部のみの欠損品。原石面を残す薄手の剥片を用い、調整は極めて粗雑。

不定形石器13は、断面三角形の分厚い剥片の一辺に刃部がみられるもの。黒曜石製、長さ4.1cm、7.8g。16は、薄手の剣辺の周辺に調整を施したもの。

本址出土の石器は、量的には少ないが、縄文前期中葉の様相を良く示したものといえる。

(小林 康男)

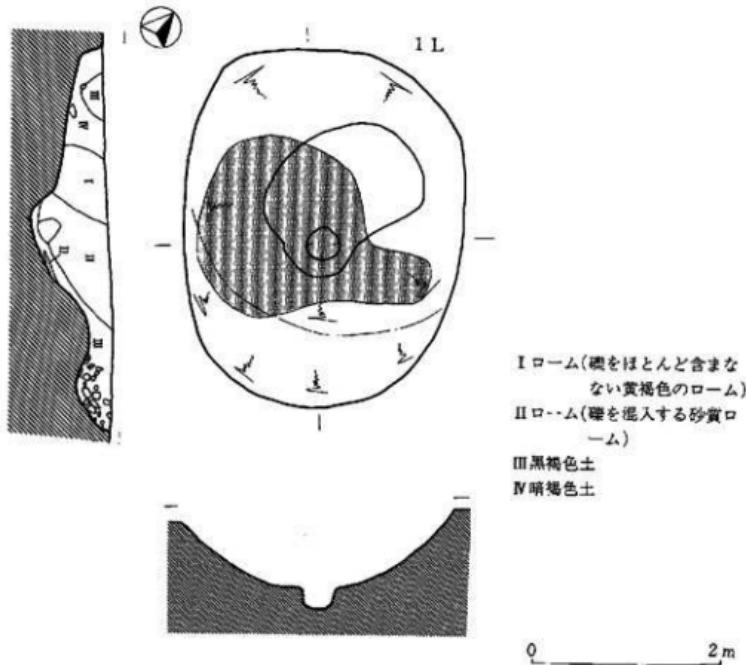
(2) 第1号ロームマウンド(第9図)

B-7グリッドで検出され、周囲に他の遺構は確認されなかった。検出面において、直径1.7~1.8mの円形で一部北側に突き出たプランを持ち、地山ローム土に比して黄褐色を帯びたローム土が、周囲を黒褐色土ないし暗褐色土に取り囲まれる形で検出された。ロームマウンドと推察されたため、地層の観察記録化のため東西に半載線を設定し、黒褐色土および暗褐色土の掘下げにより当該層が中央ローム土下に入り込んで堆積していることを確認した後、中央ローム土部も半載し、セクション固化後全掘した。

プランは東西370cm、南北290cmの横円形をなしている。落ち込みは、東側で二段になっており、上段は三日月状の緩やかな傾斜で、下段は全体的に底部へ続く階鉢状をなし、底部東寄りに直径25cm、深さ18cmのピットを持つ。検出面から底部までの深さは80cmほどである。覆土の堆積状態は、中央に再堆積ローム土が東から西へ流れた形で下部を地山に接して存在し、二層に分かれる当該層は、西側が礫をほとんど含まない黄褐色の粘土質ローム土で、東側は黄茶褐色の砂質ローム土となっている。この周囲を、東側に黒褐色土が中央ローム土下に入り込む形で堆積し、西側では暗褐色土が上部に黒褐色土の落ち込みを伴って存在する。東側の上段部には、直径10cm前後の礫が密に堆積しているのが確認された。

遺物の出土はない。

(伊東 直登)



第9図 第1号ロームマウンド

(3) 小堅穴 (第7、10、11図)

今回の調査で小堅穴は、全部で13基検出された。これらは調査区の北側を除いてほぼ全域で検出された。特にA、B、Cの19、20、21グリッドに集中して見られた。これらは、平面形は円形または椭円が主で、断面形は擂鉢状、タライ状を呈する2形態にわけることができる。しかし、その多くは掘り込みも浅く、保存状態も良くない。また遺物を伴うものもなかった。

この中で特筆すべきものは第1号10号小堅穴である。

第1号小堅穴は検出面において黒褐色土の落ち込みが確認され、その中心には焼土の混じった赤褐色土があり、落ち込みの周辺からは焼成を受けたと思われる礫も確認された。覆土は上層より赤褐色土→黒褐色土→暗褐色土で、黒褐色土、暗褐色土層中には打ちかかれたと思われる多くの礫、ローム粒が混入していた。また黒褐色土層中には炭化物も含まれ、第1号小堅穴の特異性を示している。深さは90cmで、平坦な底の中心部には、もう一段小さな落ち込みがある。

第10号小豎穴は住居の西約3mの所で確認された。規模は95×85cm、深さ25cmで擂鉢状を呈している。これは住居に付属する可能もある。

以上、概略を記したが個々については第2表を参照されたい。

(腰原 典明)

第2表 竹ノ花遺跡小豎穴一覧表

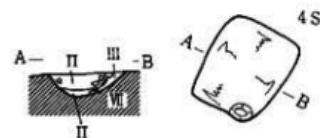
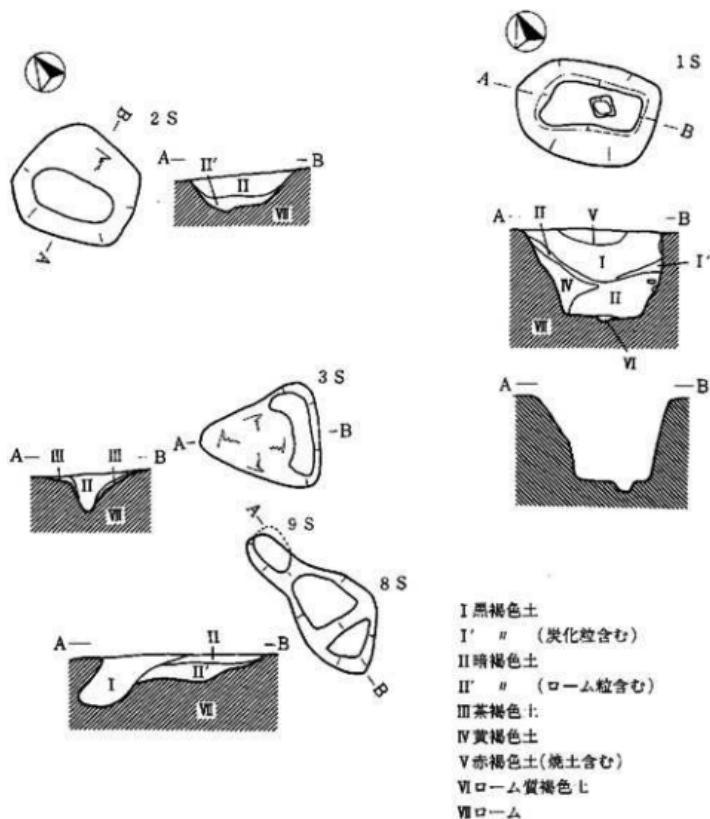
| No | 確認規模 | 平面形 | 主軸方向 | 断面形 | 底面規模 | 底面 | 深さ | 備考 |
|----|---------|-----|---------|------|--------|----------|----|--------|
| 1 | 135×110 | 椭円 | N-40°-E | たらい状 | 100×45 | 平括(小穴あり) | 96 | 検出面に焼土 |
| 2 | 125×128 | " | N-45°-W | " | 33×45 | 平括(二段) | 40 | |
| 3 | 125×113 | 三角形 | N-70°-W | 擂鉢状 | 40×30 | 丸底 | 36 | |
| 4 | 103×87 | 方形 | N-57°-E | " | 40×25 | " | 25 | |
| 5 | 90×89 | 椭円 | N-54°-W | たらい状 | 35×20 | 平括 | 22 | |
| 6 | 130×- | 不整形 | — | " | 75×- | " | 43 | |
| 7 | 75×45 | 椭円 | N-30°-E | 擂鉢状 | 48×35 | やや丸底 | 31 | |
| 8 | 130×85 | " | N-10°-W | たらい状 | 63×55 | 平括(二段) | 25 | |
| 9 | 57×38 | " | N-23°-W | コップ状 | 50×35 | " | 57 | |
| 10 | 88×85 | " | N-35°-W | 擂鉢状 | 53×40 | やや丸底 | 25 | |
| 11 | 238×90 | " | N-85°-W | " | 110×45 | " (二段) | 55 | |
| 12 | 200×150 | " | N-62°-E | " | 130×80 | " | 48 | |
| 13 | 238×- | 不整形 | — | 不整形 | 200×- | 一段 | 30 | 々 |

(4) 第1号墓址 (第12図)

本址は調査区のはば中心B-19グリッドにおいて確認された。重機による表土除去の段階で、そのほとんどがはぎとられてしまい、またローム層への掘り込みがわずかだったため本址の様子はほとんど確認できなかった。しかし古銭5枚が重なるようにまとまって出土したこと、およびローム層中に暗褐色がわずかに落ち込み状に入り込んでいたことより本址が墓址であることを確認した。

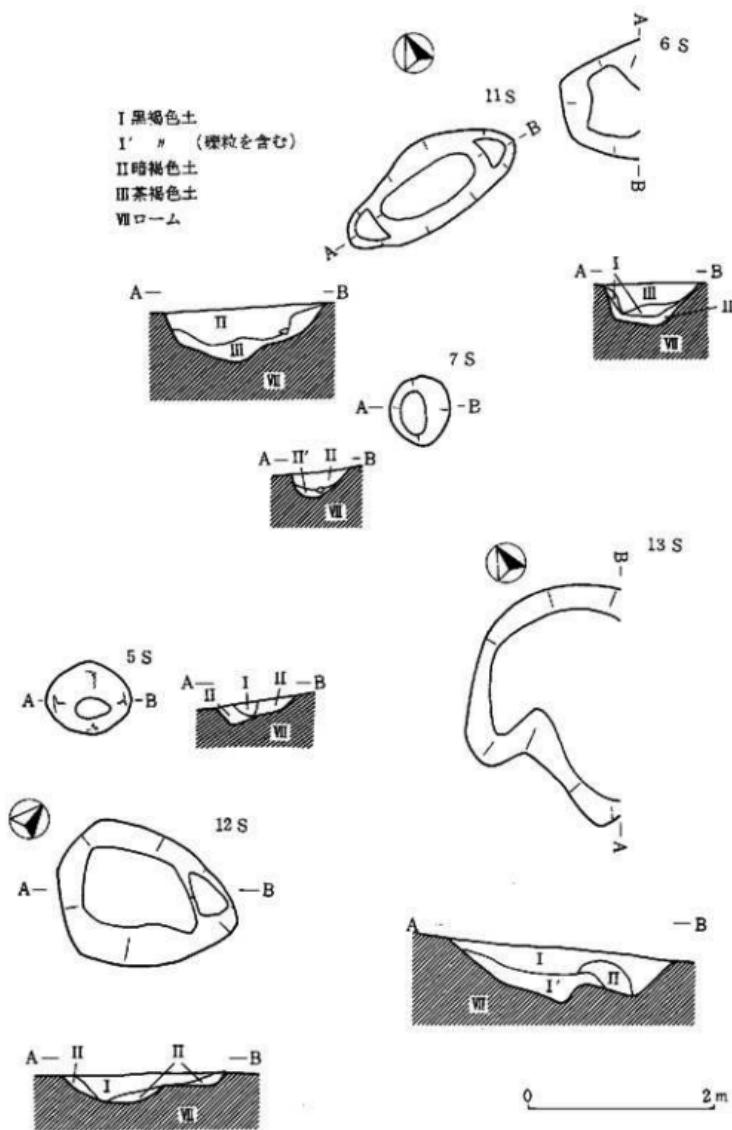
副葬品である古銭は皇宗通宝(1039)1枚、熙寧通宝(1068)1枚、政和通宝(1111)1枚、漢武通宝(1368)2枚の計5枚で、いずれも渡来銭であった。(カッコ内の年代は初鋳年を示す)。

(腰原 典明)

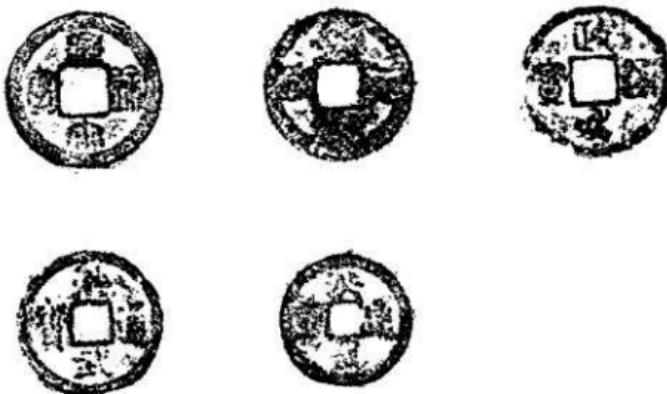


0 2 m

第10圖 小堅穴群 (1)



第11図 小堅穴群(2)



第12図 墓址出土古銭（原寸大）

(5) 造構外出土遺物（第8図） 今回の調査で、造構外より出土した遺物は大変少なかったが、この中で性格の判然とするものとして第8図の17、18があげられる。両者は縄文時代後期に属する。17は弧状の沈線と無筋の繩文によって文様構成されており、色調は黒色を呈する。18も沈線と無筋の繩文によって施文されており、横位に器面調整されている。色調は明褐色で焼成は良好である。

（藤原 典明）

5 竹ノ花と北熊井城（第13図）

東山山麓線の通過地帯にあたる竹ノ花地籍が、埋蔵文化材包含地帯ということで緊急発掘がなされた。

この竹ノ花は、中世の城館跡としての北熊井城の東端に位置している。したがって縄文時代と中世の複合遺跡にもなるのである。この度の発掘では、城関係の遺物は出なかったようであるが、竹ノ花というのは、一般に城と関係深い地名だといわれている。この場合も北熊井城の東端にあたるので、^{竹ノ花}_{館の端つまり}城のはなさきという意味かと思われる。そこで、竹ノ花地籍の含まれる北熊井城について簡記してみたい。

北熊井城は、標高760m台に、東から西に緩い傾斜をもつ東西約400m余、幅は南北やく100mの舌状台地を、いくつかの空濠によって仕切ったもので、本城を中心にして六つの郭が一列に並んだ平山城である。南側にも空濠が走り、その南側に土壘で造った大手や門の跡もある。城の南と北に

は、東の山から小河川をひいて水の手にあてている。この城の西方約100mの地には、いまも町村とよばれている侍町が屋敷剝りされ、その東端に城主の館跡と思われる地に、古い五輪塔二基があり城主の墓といわれている。また、城の東北約200mの一本杉の地に城の祈願寺常光寺があり、山寺の地名をいまにとどめている。城の裏鬼門には、山王権現日枝神社がまつられ、社殿は諏訪社境内に移築されている。この城の出城としては、南熊井城、後詰の城としては筑摩山地中腹にある本城と比定する見方もある。その他城の周辺には城関係と思われる地名を多く残している。

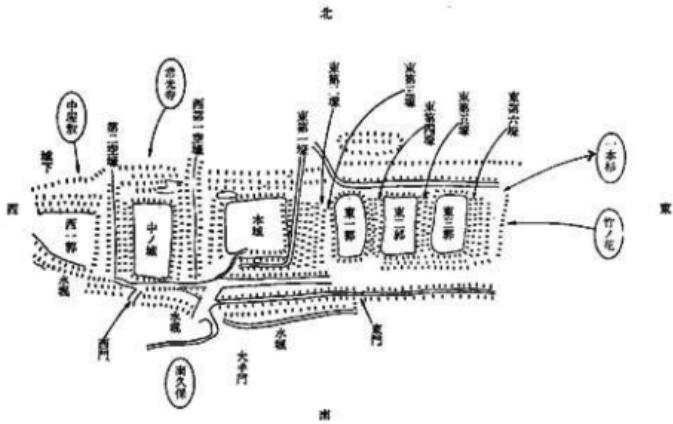
竹ノ花の東は一連の台地で空堀等の要害もないでの、この方面的備えを堅固にするためには、這戻や防衛のための施設もなされたであろうし、平素は見張りを置いて監視の目をゆるめなかつたであろう。広い原野があるので、馬場や的場としても利用したであろうか。

この城の築城や城主に関する確かな記録はないが、松本の小笠原氏が南の源訪、伊那、木曾方面に備える城として構えたであろうことは想像に難くない。しかし天文17年7月19日の塙尻峠の決戦で、小笠原長時が甲斐の武田晴信に敗れてから、この地は約30年間武田氏の支配するところとなった。武田氏の記録「高白齋記」には、天文21年6月8日、熊井城築立てのことがみえるので、小笠原氏の造った城を武田氏が、北方への前進基地に改造したものであろう。

龍井城における合戦の記録はないが『雨宝山常光寺由来記』には、一本杉常光寺は、武田軍の兵火で焼失したと記され、寺跡には焼けた石などもあったという。とすれば竹ノ花の付近でも、信平軍の合戦があったのであろうか。

(小盛 克己)

第13図 北館井地概念図（「片丘村誌」より転載）



6 まとめ

竹ノ花遺跡の立地する舌状台地先端は北熊井城址となっている。今回の調査区から西方に隣接して北熊井城址があることから、これに付随する何らかの遺構の発見が期待された。しかし、残念ながら調査区内からは、これに伴う可能性が幾分考えられるものとしては、錢貨5枚を埋納した墓壙がある程度で明確な遺構、遺物の検出はなかった。

今回の調査では、縄文前期の住居址の発見が注目される。黒浜期に属すると考えられるこの住居址は、円形プランを持ち、地床がを設けたもので、この地域では類例に乏しい貴重な検出例となった。住居伴出遺物は僅少であったが、この時期の好資料となろう。住居は南面する斜面に位置していたが、これより北側に傾斜する地区には小竪穴群が検出されている。覆土からの遺物の出土がなかったため帰属時期が不明確であるが、前期とすれば住居址との関連性で扱える必要があり、集落構造上興味深い研究課題を提供することになる。

本遺跡は、昭和62年度に今回調査区に隣接した西側区域を発掘することになっている。より広範囲な調査が実施されれば遺跡の全体像もより明確になるものと期待される。

（小林 康男）

第Ⅳ章 結語

昭和61年度に計画された東山山麓地区農道整備事業により影響を受ける遺跡は、片丘北熊井今泉、竹ノ花、中原の三遺跡であった。ともに工事着工に先立って発掘調査を実施し、記録保存の処置が取られたが、本報告書にはこのうち、今泉、竹ノ花を載録した。

今泉遺跡は、ロームマウンド1基、黒曜石製石鎌1、黒曜石剣片2が得られたのみで大きな成果は認められなかった。この地域は、富士塚遺跡の下方にあたり、遺物の出土状態が上方からの流れ込みがあった可能性が強いことを考慮に入れると、富士塚遺跡の最末端に位置づけられる地域であることが判明した。富士塚遺跡の広がりを確認できたという意味での成果といえる。

竹ノ花遺跡は、以前から縄文、平安時代の遺物が採集されており、しかも北熊井城址に隣接していることからその調査結果が注目された。縄文時代では、前期黒浜期の住居址が検出され、これに伴う遺物が出土した。類例の乏しい貴重な資料といえる。また帰属時期がはっきりしないが小豊穴も検出されている。住居と同時期とする可能性もある。平安時代に關係するものは今回の調査では確認できなかった。この他には、中、近世に属すると思われる墓壙が1基検出されている。たった1基のみであり、北熊井城址との関連性を物語るものとはいえそうにない。なおこの竹ノ花遺跡は、今回の調査地域より西方部分を昭和62年度には土地改良事業に伴い調査が予定されている。城址に關係する遺構の検出が期待され、竹ノ花遺跡の全体像もより明確に把握されるものと思う。

以上のような成果をあげた両遺跡の発掘調査が事故もなく無事終了できたことは、地元役員の方々、地区民、調査参加者等多くの方々の御援助の賜です。厚く感謝申し上げます。

(小林 康男)

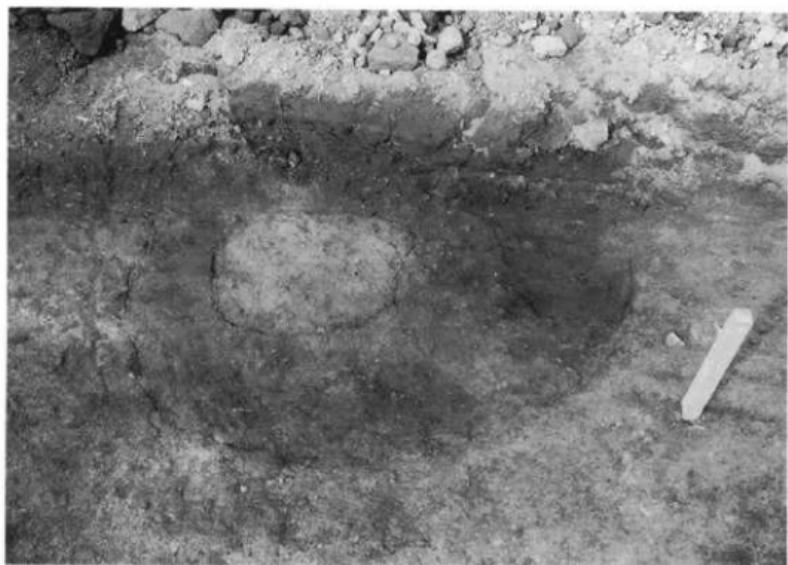
図 版



今泉遺跡全景（発掘前・北側より）



今泉遺跡調査地区全景（北側より）



今泉遺跡第1号ロームマウンド（検出面）



今泉遺跡第1号ロームマウンド（完掘）



今泉遺跡発掘作業風景



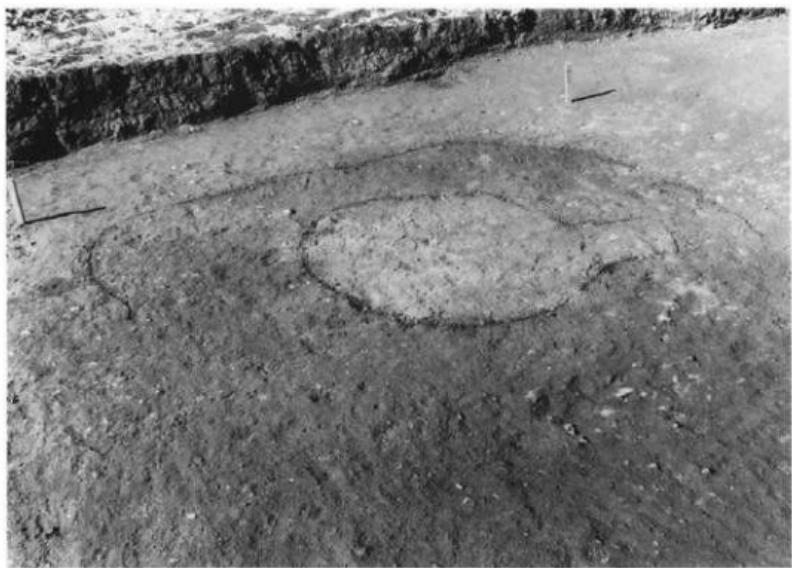
竹ノ花遺跡全景（北側より）



竹ノ花遺跡調査地区全景（南側より）



竹ノ花遺跡第1号住居址（西側より）



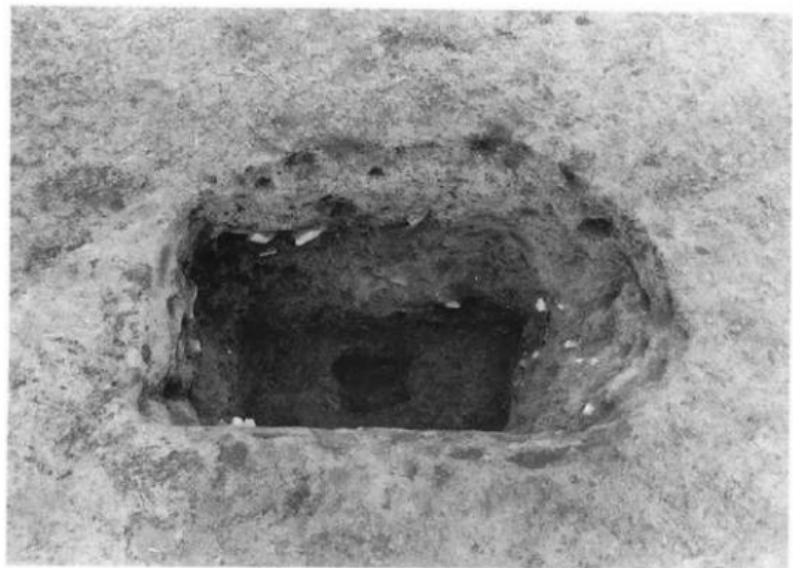
竹ノ花遺跡第1号ロームマウンド（検出面）



竹ノ花遺跡第1号ロームマウンド（断面）



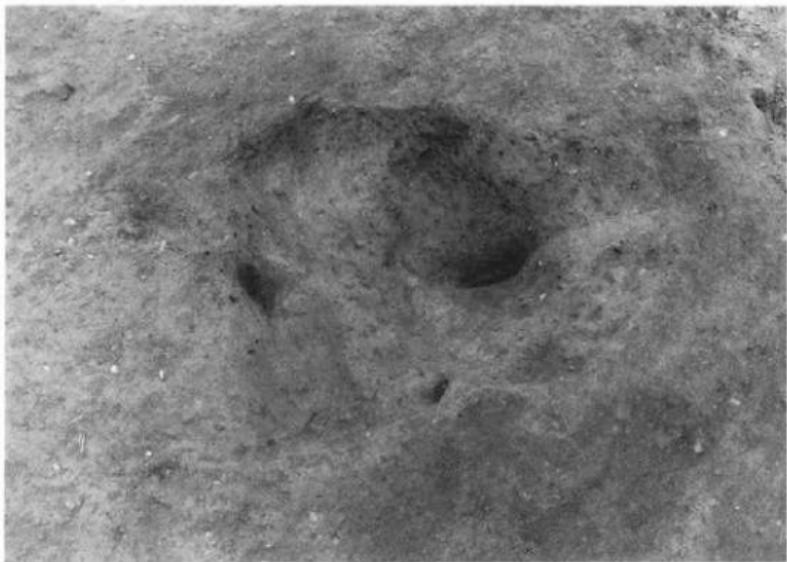
竹ノ花遺跡第1号ロームマウンド（完掘）



竹ノ花遺跡第1号小竖穴



竹ノ花遺跡第2号小竪穴



竹ノ花遺跡第3号小竪穴



竹ノ花遺跡第4号小竪穴



竹ノ花遺跡第5号小竪穴



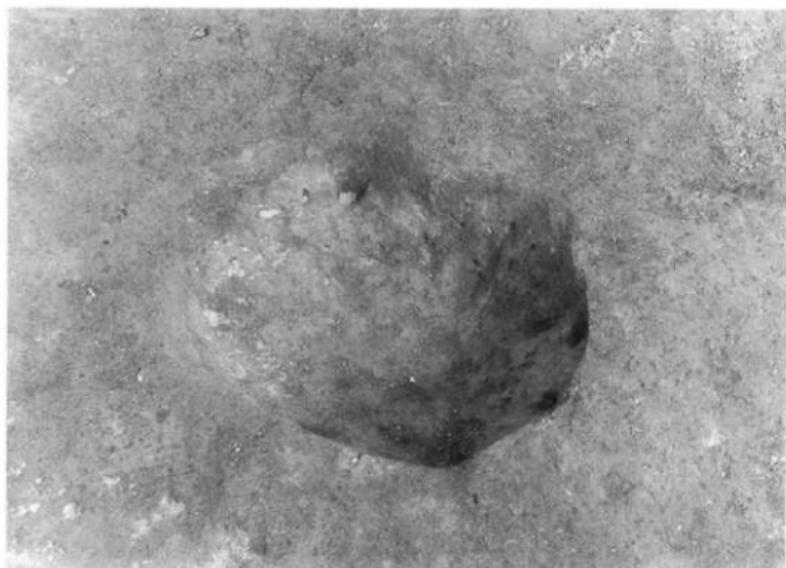
竹ノ花遺跡第6号小竪穴



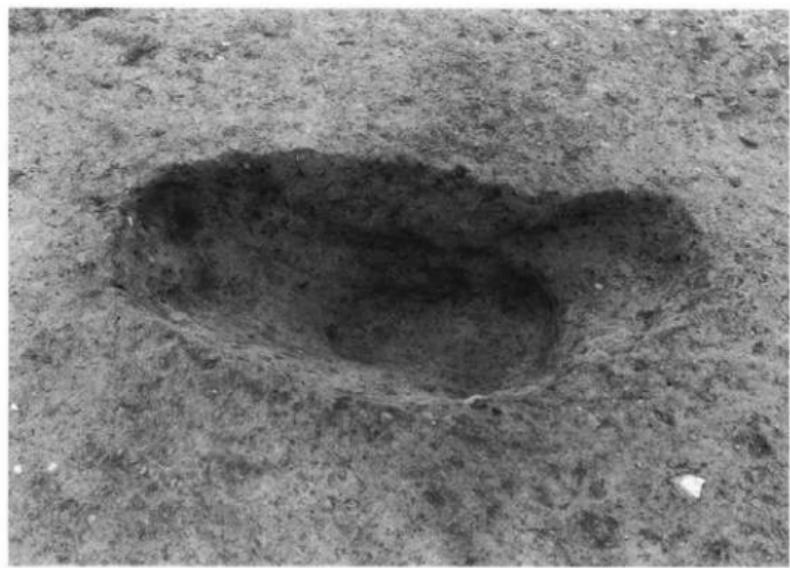
竹ノ花遺跡第7号小竪穴



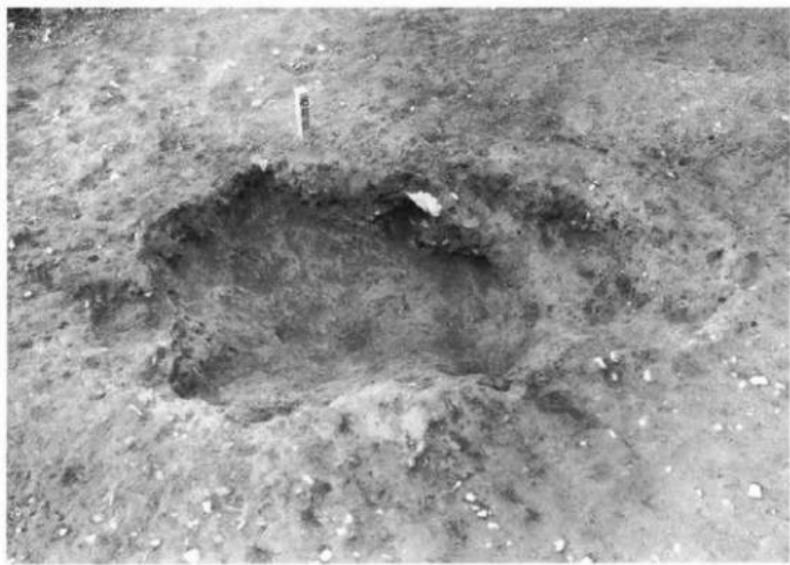
竹ノ花遺跡第8・9号小竪穴



竹ノ花遺跡第10号小竪穴



竹ノ花遺跡第11号小竪穴



竹ノ花遺跡第12号小竪穴



竹／花遺跡第13号小竪穴



竹／花遺跡発掘作業風景

今泉・竹ノ花遺跡

—長野県塩尻市今泉遺跡・竹ノ花遺跡発掘調査報告書—

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月22日 発行

発行 塩尻市教育委員会

